

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文には表記を変えたり省略したりした部分があります。

鹿児島に住む小学五年生、盛田美央のクラスに鈴木青（ハルくん）という転校生がやってきた。ハルくんのお父さんは、ドリーム・サーカスのマジシャン（手品師）だ。ある日、算数の豆テストの点数が悪かった二人は、居残り授業のメンバーになってしまった。

「じゃあ、美央ちゃん、がんばってね。」

めぐちゃんは、ちらりと美央を見て、亜美ちゃんと帰っていった。

「公園でバレーするが。もうすぐ試合やし。」

「がんばったら、レギュラーになれるかもね。」

背中ごしに声がきこえて、美央はますますうなだれた。

しばらくして、上野先生が入ってきて、居残り授業がはじまった。豆テストのやりなおしだ。となりでハルくんが、めんどくさそうにいった。

「あーあ、父さんなら、こんなの魔法で一発であるのに。」

「ハルくんのお父さんってマジシャンなんだってね。」

美央がいうと、ハルくんはちよつと不服そうな顔をした。

「マジシャンではない。うちの父さんは、本物の魔法使いなのである。」
まじめな顔で左右に首をふる。

「……へえ、そうなんだ。」

美央はすつと目をそらした。^(a)シツレイになつてはいけなければならない。信じたわけではない。けれどハルくんは得意そう

だ。「ほんとうだ。表むきはマジシャンつてことになっているけど、本物なのだ。こんなテストなんか、魔法でばばっばあ

る。」
ハルくんは美央の解答用紙の上で、鉛筆^{えんぴつ}をふった。まるで指揮者^{しきしや}がタクトをふるみたいだった。

あれ？
美央は思わずまばたきをした。鉛筆の先から、なにかがぱらぱらと舞^まった気がしたのだ。紙テープではない。もっと
ずつとこまかなもの。桜島の灰くらいかもしれない。

なんだろう？

美央は目をこらしたが、なんにもなかった。首をかしげて、テストにむきなおる。

と、つぎの瞬間^{しゅんかん}、不思議なことがおこった。最後の文章問題の式が突然^{とつぜん}ひらめいたのだ。

三・二メートルの棒の重さをはかったら、十六キログラムでした。この棒の一メートルの重さは何グラムでしょう。」
豆テストは時間内にできなかったので、白紙だったところだ。

「十六わる三・二だ。」

ぱんつと、はねあがるように思いうかんだ答えをいうと、

「お、すごいじゃないか。」

上野先生は、大きく手をうった。

「おちついて考えればわかるんだよ。」

先生はうれしそうにいったけれど、⁽²⁾美央はこっそり息をのんだ。

魔法だ。

そう思わずにはいられなかった。

やっぱり魔法だ。

美央が確信したのは、その後のことだった。居残り授業をおえて、校門を出ようとすると、ちょうどグラウンドのネットをつかつて、六年生がバレーボールをしていた。

「あ、美央ちゃん。」

六年生は美央に気がついて、手まねきをした。

「ひとり足らんのよ。入ってくれる？」

「はい。」

美央は、ふたつ返事でコートにむかった。あいていたポジションに入った。

とても調子がよかった。レシーブ、トス、しっぱいはない。サービスエースもとった。

「すごいじゃん。」

「五年生のレギュラーは美央ちゃんが決まりだが。」

六年生たちから、口ぐちにいわれ美央は確信をした。

やっぱり魔法がかかるとる。

「もう一度、わたしに魔法をかけて。」

美央がハルくんにおねがいしたのは、それから四日後のことだった。ハルくんの魔法がかかった日は、算数もバレーも絶好調だったのに、効き目はだんだんうすれていくものらしい。三日もすると、もとどおりになってしまった。算数の時間は、いつあてられるかとひやひやし、あんなにほめられたバレーも、つぎのクラブ活動ではミスを連発した。そのかわり、めぐちゃんの調子がよくて、レギュラーはもつていかれそうだ。このままではまずい。

「魔法？」

深刻な顔をしたのむ美央に、ハルくんはまゆをよせた。

「そう。居残りのときに、ハルくんがかけてくれたやつだが。ばばって。」

「おれ、そんなことしたであるか？」

ハルくんは首をひねったが、美央のほうは切実だった。

「したよ。」

これから算数のテストがあるのだ。きのうは、自分なりに勉強もした。これまでやった豆テストのやりなおしだ。けれど、やっぱりなかなか正解できなかった。こんなことでは、こんども平均点を大きく下まわる。めぐちゃんの点数はいいだろうから、おばさんがお母さんに自慢をして、またお母さんの機嫌がわるくなる。

考えただけで泣きたくなくて、美央は必死でうったえた。

「あのあと、わたし、急に問題がわかったし、バレーもうまくできたんだ。魔法にかかったとしか思えんよ。」

ひと思いにいうと、

「ほんとうか？　ほんとうにかかったのであるか？」

ハルくんは、なぜか身をのりだしてきた。つめよられて美央はついあとずさったが、こつくりとうなずいた。と、ハルくんはこぶしをかためて「やったである」とガッツポーズをつくった。

「練習の成果が出てきたようである。」

うれしそうにいいながら、いそいそと鉛筆をとりだした。

「よし。かけるのである。」

ハルくんはいつて、自分の目をとじた。そして鉛筆を自分の顔の前に立て、なにやらぶつぶつとなえたあと、目をひらいてじいつと美央の目をのぞきこんだ。だれかにこんなに真剣な顔で見つめられたのははじめてで、美央は体が石になったようになってしまった。ハルくんの黒目は大きい。見ていると、すいこまれそうなくらい、真っ黒だ。その真ん中に自分の顔がうつっている。

と、目の前で鉛筆がふられた。

タタタタターン。

リズムをとっているみたいにかろやかだった。

「かけたのである。」

ハルくんがいい、美央はふつとわれにかえる。

「あ、ありがとう。」

とりあえずおレイをいうと、

「どうであるか？　なにか変わったか？　どこか変化したであるか？」

ハルくんがせきたてるようにたずねてきた。

「そ、そうだね。」

美央はちよつと答えにつまった。べつになんの変化も感じなかったからだ。けれど、とてもそんなことはいえない。「そういえば、ちよつとかるくなったかも。」

だからそう答えると、

「よっしゃあ。」

ハルくんはまたガッツポーズをつくった。

「かるくするのは、たいせつな魔法なのだ。」
得意げに胸をはる。

「そうなの？」

「ああ。ごちゃごちゃしているところが消えたわけであるからな。消すのは魔法の基本なのである。」
質問も、ハルくんのいうこともよくわからなかったが、美央はだまってきたことにした。

「人間というのは、ごちゃごちゃ考えすぎる生きものなのだ。いつも父さんがいつている。頭の中がごちゃごちゃしていると、できることまでできなくなってしまうのだ。」

「ごちゃごちゃ。」

「そう。盛田さんは、たとえば算数の時間に、なにを教わったかおぼえているか？」

「うーん。」

美央はかしげかけた首を小さくふった。

「おぼえてないかも。」

算数の時間は、先生にあてられないようにとか、めぐちゃんにツげ口(b)されないようにとか考えて、びくびくしている。授業の内容のことなんか、ちっともおぼえていなかった。

「ほんとだ。」

よくよく考えて美央は目を丸くした。まるで自分の心の中をのぞかれたみたいだった。

「うちの父さんは、魔法使いだからなーんでもわかるのだ。」

ハルくんは自慢そうに胸をはった。

「そういえば。」

美央はうなずきながら、バレーボールのことも考えてみた。

うまくできなかったときは、めぐちゃんがいたときだ。視線を感じただけで、びくついた。おばさんやお母さんの顔が頭の中でぐるぐるまわって、ボールまで怖(こ)くなった。

反対にうまくできたときは、算数ができたあとだった。先生からもほめられて、気分がよかった。めぐちゃんもいなかったし。

「ごちゃごちゃのせいでできることまでできなくなったら、もったいないである。」

ハルくんはいった。

「そうだね。」

美央はうなずく。算数はもともと苦手にしても、得意なバレーボールまでできなかったのは、ごちゃごちゃ考えていて集中力がなくなったからかもしれない。

算数のせいでバレーの調子までわるくなるなんて、もったいないどころか、オオゾンだ。(c)
そう思ったとき、

レギュラーをとりたいたい。(d)

美央の、おなかの底からアツい気持ちがあがってきた。

ガラガラガラ。

教室の戸がひらいて、先生が入ってきた。テスト用紙を持っている。

「じゃあ、テストをはじめます。いちばん前の人は、うしろにまわしてください。」

美央の前にも人数分のテスト用紙がおかれ、一枚とって、うしろにまわした。

「では、はじめ。」

先生の声で美央は、おずおずとテスト用紙を見る。

あ。

そのとたん、思わず声を出しそうになった。

だいじょうぶ。ちゃんと、魔法がかかるとる。

一問目を見た美央は、にんまりと笑った。きのうやった問題とおんなじだったからだ。

美央はぎゅつと鉛筆をにぎった。

(まはら三桃『青がやってきた』偕成社)

問一

——線部 (a) ・ (d) のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

問二

——線部 (A) ・ (B) のここでの意味としてもっとも適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で

答えなさい。

(A) ふたつ返事で

ア すこし迷っているが、最後は「いいよ」と言うこと。

イ 最初は「だめ」と言うが、すぐに「いいよ」と言いかえること。

ウ しぶつてはいるが、ゆっくりと考えて「いいよ」と言うこと。

エ ためらうことなく、すぐに「いいよ」と言うこと。

オ 友だちに聞いて相談してから、「いいよ」と言うこと。

(B) いそいそと

ア あわてている様子で

イ 心が浮き立^うつ様子で

ウ 動揺^{どうよう}している様子で

エ きどっている様子で

オ 希望にあふれる様子で

問三

——線部①「不服そうな顔をした。」とありますが、ハルくんはなぜこのような顔をしたのですか。説明しなさい。

問四

——線部②「美央はこっそり息をのんだ。」とありますが、なぜ美央は「息をのんだ」のですか。説明しなさい。

問五

——線部③「ハルくんはまゆをよせた。」とありますが、この時のハルくんの様子を説明したものとしてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 美央があまりに切実な様子で頼むが、なんのことを言っているのかすぐにはわからず、不審に思っている様子。

イ 美央があまりにさししまった様子で話しかけてきたので、どう反応してよいのかわからず、困っている様子。

ウ 美央がこちらの様子も気にかけずにずけずけと話しかけてきたので、今までになく不機嫌になって

いる様子。
エ 美央が困り果てた様子で話しかけてきたので、とてもかわいそうに思い、つらい気持ちに共感している様子。

オ 美央が突然思いもかけないことを話しかけてきたので、戸惑ってしまい、このあとどう話そうかと考えている様子。

問六

この文章の内容や表現の特徴の説明として適切なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 算数の苦手な美央は、マジシャンであるハルくんのお父さんの魔法で算数が得意になり、気持ちが明るくなった結果、バレーボールクラブでもレギュラーが確実になった。

イ 何をしてもしだめな美央だったが、ユーモラスな転校生ハルくんの的確なアドバイスによって、孤立しそうになっていたクラスの中で自信を持てるようになってきた。

ウ めぐちゃんや他の人を意識するとバレーボールも算数もうまういかなかった美央が、ハルくんの魔法によって頭の中のごちゃごちゃがすっきりし、前向きな気持ちになった。

エ 最初は、ハルくんの魔法を信じていなかった美央だが、実際に算数の問題が解けたことで信じるようになり、そのあとはすべて順調にすすみ、ハルくんを信じるようになった。

オ 誰もが信じなくなる魔法について書くことで、作品全体が幻想的な雰囲気になり、その中で美央がお母さんとの関係を少しずつ良くしていることを描いている。

カ 会話文を多く用いることにより、ハルくんの独特な話し方を印象的にし、また美央の心情の変化も場面の展開に合わせるようにていねいに描いている。

〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文には表記を変えたり省略したりした部分があります。また、本文中の図は省略しています。

I

生物の特徴のひとつに、「自己増殖」がある。ロボットと人間の差は自己増殖の有無にある。そうだとすると、オスは生物ではないのか……と不安になってしまう。

自己増殖とは子孫を残すだけではなく、細胞分裂をして細胞が増殖することを含む。つまり、髪の毛が伸びたり、爪が伸びたりするのも自己増殖である。心配しなくても、オスも立派な生物なのだ。

しかし、メスが直接、子孫を残すのに比べると、オスはその繁殖を補助する役割にすぎない。やはり、オスはメスのために作られたのである。

このように述べると、オスのせつなさを **A** たり、いやオスの方が立派なのだと **B** たりするかもしれない。

人間は、「男と女はどちらがえらいか」「男と女はどちらが得か」「男らしさと女らしさ」など、男女の差にこだわる。それは、人間が生まれつき男と女に分かれていて、男や女として人生を送るからである。

しかし、生物にとって、オスとメスは助け合って子孫を残すための単なる役割分担にすぎない。生物の世界では、オスとメスの差異は、私たち人間が思うほど厳密ではない。

そうだとすれば、時と場合に応じて役割をコウタイしてもいい。実は、生物のなかには、オスとメスが明確に分かれておらず、オスからメスへ、メスからオスへ性転換するものも少なくない。

それでは、そんな性転換する生き物たちを見てみることにしよう。

生まれた時はすべてオス

子どもたちに人気のデイズニー映画『ファインディング・ニモ』は、魚のクマノミの仲間、カクレクマノミの物語である。映画では、卵を産んだお母さんのコーラルは、オニカマスの攻撃を受けて命を落とす。そして、残されたお父さんのマールインが、息子ニモを育てていく。

実際に、クマノミはオスが子育てをする。メスは卵を産みっぱなしで、世話はしない。オスは、メスが産んだ卵を口のなかに入れて卵を守る。そして、卵から孵ったあとも、子どもが小さいうちは、口のなかで外敵から守るのである。なんとも父性愛に満ちた魚である。

クマノミには変わった特徴がある。生まれた時には、すべてオスなのである。

映画では、オニカマスに卵を襲われ、残ったのはニモだけだった。ニモはもちろんオスであり、襲われた他の卵もすべてオスのはずである。しかし、不思議なことがある。ニモには、卵を産んでくれたお母さんがいた。生まれた卵がすべてオスだとすると、お母さんはいないはずだ。

実は、クマノミはオスからメスに性転換することが知られている。

たくさんいるオスのなかで、もっとも大きなオスがメスに転換する。そして残されたオスのなかで、もっとも大きな個体だけが子どもを残す、成熟オスとなる。こうして、オスとメスがペアになるのだ。

クマノミは、魚のなかでは珍しい一夫一妻制でもある。そして、ドクのあるイソギンチャクに守られながら、暮らしている。独り立ちしたばかりの幼魚のうちは浮遊生活をしているが、適当なイソギンチャクを見つけると、そこに定住し、イソギンチャクの外に出ることはない。そのため、オスとメスが出会うチャンスはほとんどない。

小さなイソギンチャクのなかでの共同生活なのだから、オスばかり、メスばかり、あるいはメスをめぐってオ

スが争えば、とても子孫を残すことはできない。

そのため、イソギンチャクに棲む集団のなかで、もつとも大きな個体がメスとなり、次に大きな個体が繁殖のためのオスとなって、夫婦となるのである。メスが死ぬと、成熟オスがメスに性転換を遂げる。そして、未成熟オスのなかでもつとも大きかったものが繁殖能力を持ち、新しい夫婦となるのである。

映画では、ニモのお母さんは不幸にもオニカマスに襲われてしまった。ということは、父性愛を発揮していたニモのお父さんが、メスになる日も、そう遠くはないはずだ。

性転換する魚たち

このようにオスからメスへ、メスからオスへ「性転換」するのは奇妙な気もするが、魚の世界ではよく見られる現象である。魚にとつて、性は、私たち人間が思っているよりもずっと自由なものなのだ。男らしいとか、女らしいなど、魚にとつてはそれほど重要なことではないのだ。

魚類の性転換には、オスからメスに転換するものと、メスからオスに転換するものがある。

クマノミは小さいうちはすべてオスで、もつとも大きなオスの個体がメスに性転換する。大きな個体がメスになるのは、合理的な理由がある。大きな体のほうが、小さな個体よりもたくさん卵を産むことができるからだ。

ウツボの仲間のハナヒゲウツボも、生まれた時にはすべてオスである。そして、大きくなるにしたがつて、メスになる。クマノミは一番大きな個体がメスになるが、ハナヒゲウツボは、大きくなるとすべての個体がメスになる。

つまり、すべて「姉さん女房」である。精子を作るだけなら、体は小さくてもいい。しかし、卵をたくさん産

むためには体は大きいほうがいい。そのため、体が大きく成長した個体がメスになるのである。なんとも、うまく考えたものだ。

クロダイも、オスからメスに転換することが知られている。クロダイやウツボも、クマノミと同じように、生まれた時はすべてオスである。そして、5年ほどを経て、大きくなるにしたがつて、オスとメスに分かれていく。こうすることで、オスの数を多くし、繁殖のチャンスを増やすことができるのだ。

生まれた時はすべてメス

クマノミは、卵をたくさん産むためにオスからメスへ転換した。いっぽう、魚の性転換にはオスからメスへ転換するのではなく、メスからオスへ転換するものもある。実際には、魚ではこのほうが多い。

体の大きな個体が、卵を産むメスになるのは合理的な気がするが、成長した個体がオスへ転換するのはなぜだろう。

コブダイは、生まれた時にはすべてメスである。そして、大きくなったメスどうしが戦い、勝利した個体がオスになる。「雌雄を決する」という言葉があるが、コブダイは本当に戦いでオスとメスを決めるのだ。

コブダイは1匹のオスと複数のメスで群れを作る。いわゆる、ハーレムを形成するのである。ハーレムではオスが縄張りを守り、そのなかでメスを独占する。そのため、縄張りを守るために、戦いに強いオスが必要となる。だからこそ、もつとも強い個体がオスとなるのだ。

クマノミのように一夫一妻の魚の場合は、体の大きなメスのほうが卵を多く残すことができる。しかし、ハーレムを作る一夫多妻の場合は、体の大きな1匹のメスが卵を産むよりも、体は小さくても複数のメスが卵を産んだほうが多くの卵を残すことができる。そのため、1匹だけがオスとなり、残りの個体はメスとして卵を産むの

である。

コブダイのような大きな魚の口のなかやえらを掃除する魚として知られるホンソメワケベラも、メスからオスへ性転換する魚である。ホンソメワケベラは小さな魚だが、広い縄張りを持つ。そして、オスを守る縄張りのなかで5匹程度のメスが暮らす一夫多妻の生活を送っている。

ホンソメワケベラも、生まれた時はすべてメスである。そして、群れのなかでもっとも大きな個体が、オスとなる。オスがいなくなると、残ったメスのなかでもっとも大きなメスがオスに転換する。

ちなみに、パートナーを失ったオスどうしが出会えると、体の小さなほうがメスに戻るといふ。いつ食べられるかわからない魚の世界は、生存率が低い。そのため、自在に、オスになったりメスになったりできるようにしているのだ。

(稲垣栄洋『オスとメスはどちらが得か?』祥伝社)

問一

線部(a)・(b)のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

問二

I に入れる見出しとしてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 人間とロボットの差 イ オスとメスの役割 ウ 生物にとつての自己増殖
エ 男らしさと女らしさ オ メスからオスへの性転換

問三

A・B に入れるのにもっとも適切な言葉を次の中からそれぞれ選び、本文に合う形に変えて

答えなさい。

- ・ うらやむ ・ 嘆く ・ いたわる ・ 強がる ・ せめる ・ たのむ

問四

線部①「クマノミはオスからメスに性転換することが知られている。」とありますが、クマノミが「オスからメスに性転換する」理由としてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア クマノミはたくさんいるオスの中でもっとも大きなオスがメスに転換するので、オスからメスへの性転換ができるだけ多く行われないと、よりたくさんの子孫を残すことにならないから。

イ クマノミはたくさんいるオスの中でもっとも大きなオスがメスに転換するので、できるだけ成長が進んだ時期に性転換をする必要がある、特にオスからメスへの転換が求められているから。

ウ クマノミは一夫一妻制であり、浮遊生活のちイソギンチャクを見つけると定住して共同生活をするので、オスとメスとが出会うチャンスがほとんどなく、性転換をした方が子孫を残しやすいから。

エ クマノミは一夫一妻制であり、浮遊生活のち適当なイソギンチャクを見つけたあとは定住しがちなり、大きいオスがメスにならないと新しい夫婦が出来上がらずそのほかの魚に負けてしまうから。

オ クマノミの例のように、魚はなるべく子孫が残されるように工夫された体のつくりをしており、その機能が特にはつきりと出るのがクマノミのメスだから。

問五

線部②「クマノミは一番大きな個体がメスになるが、ハナヒゲウツボは、大きくなるとすべての個体がメスになる。」とありますが、それはなぜだと考えられますか。十五字以内で答えなさい。

問六

——線部③「コブダイは本当に戦いでオスとメスを決めるのだ。」とありますが、なぜ戦いで決める必要があるのですか。説明しなさい。

問七

この文章の内容として正しいものにはAを、間違っているものにはBを、それぞれ書きなさい。

ア どんな魚にもそれぞれ工夫された生態があり、人間もそれをできるだけまねたほうがよい。

イ クマノミやクロダイ、ウツボの仲間は生まれた時はすべてオスだが、やがてオスやメスに分かれる。

ウ 生物の世界ではオスとメスの差異は厳密ではなく時と場合に応じて役割分担をしている。

エ ホンソメワケベラは生まれた時はすべてメスだが、縄張りなわばを広げるためにその後性転換をする。

問八

~~~~線部「魚にとって、性は、私たち人間が思っているよりもずっと自由なものだ。男らしいとか、女らしいなど、魚にとってはそれほど重要なことではないのだ。」とありますが、人間の社会でも「男らしい」「女らしい」と区別しなくなってきました。その例としてどのようなことがあげられますか。それに対するあなたの意見とそう考える根拠こんきょを書きなさい。

|      |  |
|------|--|
| 総 点  |  |
| 科 目  |  |
| 国 語  |  |
| 受験番号 |  |
| 氏 名  |  |

|      |  |
|------|--|
| 総 点  |  |
| 科 目  |  |
| 国 語  |  |
| 受験番号 |  |
| 氏 名  |  |

|    |     |   |
|----|-----|---|
| 問一 | (a) |   |
|    | (b) | げ |
|    | (c) |   |
|    | (d) | い |

42

A

B

(c)

(d)

42

10

100

|  |  |
|--|--|
|  |  |
|--|--|

|    |     |     |
|----|-----|-----|
| 問一 | (a) | (b) |
|----|-----|-----|

(a)

(b)

A

A

B

|  |  |
|--|--|
|  |  |
|--|--|

|  |  |
|--|--|
|  |  |
|--|--|

ア

ア

イ

ウ

工